

初期キャリア移動の構造に関する職業経歴データを用いた分析

——東大社研パネル調査 (JLPS) データの分析 (3) ——

東京大学 石田賢示

1 問題設定

本研究では、離学後の若年者の初期キャリア移動の構造がどのようなものであるかを検討する。若年非正規雇用や若年無業・失業の規模が拡大し、不安定な初期キャリア移動経験が問題視されるなかで、不安定な雇用状態からより安定的な雇用状態への移動は生じうるものなのかということが議論されてきた。2000年代の社会階層論の文脈では正規雇用・非正規雇用の軸によるキャリア移動の障壁の存在が指摘されてきたが、先行研究ではキャリアの初期段階では安定的な雇用状態への移動が比較的生じやすい結果も報告されている。以上の点の検証のため、本研究では初期キャリア移動の構造（地位の間の移動パターン）を、職歴開始後の時間をコントロールしつつ明らかにすることを目的とする。

2 データと方法

用いるデータは東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトが企画、実施している東大社研パネル調査 (JLPS) のうちの、職業経歴データである (第3波調査, 2009年)。分析の対象となるサンプルは、そのうちの若年・壮年サンプルである。分析では、ある時点と1期後の地位変数、そしてその職歴が開始されてから何年目かの変数を用いた三元表を分析する。サンプルは、離学後10年経過時点までのものを用いた。地位の変数として、従業上の地位、そしてSSM総合分類をやや簡略化し無業を含めた変数 (職業的地位) の二種類を用いる。このクロス表について対数線形モデルをあてはめる (log-rate model) ことで、初期キャリア移動の構造について検討を進める。

3 結果

ここまでの分析の結果、従業上の地位については、男性では「非正規雇用→正規雇用」という移動パターンが観察され、女性については加えて「正規雇用→無業」というパターンも観察された。無業から正規雇用への移動という経路は、有意にモデルを改善するものではなかった。職業的地位については、無業への移動と無業からの移動について男女間で、また女性サンプルでは地位の間にパターンに差がみられた (より詳細な結果は、当日の報告および配布資料にて説明する)。

4 まとめ

少なくとも初期キャリア移動という側面では、非正規雇用と正規雇用の間に移動障壁が存在するという二重構造論的な見方が必ずしもあてはまらない可能性が示唆された。その一方で、無業からの移動が困難であることを分析結果は示唆していると思われる。また、職業的地位の分析結果からは、各職歴を開始する時点での階層的地位が、その後のキャリアを非常に強く規定するという点が読み取れると考えられる。その他、さらに検討を進めた結果については、当日の口頭報告にて説明したい。

【謝辞】

本研究は、科学研究費補助金基盤研究 (S) (18103003, 22223005) の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。記して感謝の意を表したい。